

ピレヌヌ・シチリア・十字軍

—ヨーロッパ中世の教え方の一考察—

神奈川県立横須賀大津高等学校

佐藤 雅信

はじめに

世界史の教科書は少しずつ進化している。我々が高校生であった時代の内容とは明らかに違うが、それ以後もかなりの部分の変更がある。明確にわかるのが用語集の項目である。ヨーロッパ中世の部分について山川出版『世界史用語集』の八〇年代のものとは最新版(二〇〇六)との変わっている部分をピックアップしてみよう。

「地域」「国家」などの表現 発音・表記の変化に加え、「人」は「人」へ変わっている。「ゲルマン民族」をはじめ「西ゴート族」「ヴァンダル族」はみな「人」になっている。ドイツ史学の用語である「Völkerwanderung」を「民族大移動」と訳してきたが、「民族」という概念は近代以前にはないというスタンスである。

ヤゲロー朝→ヤゲヴオ朝 Jagiello (kreska) を付した E (I) をポーランド語発音にした。しかしポーランド語では、姓の形ではヤギエウオ Jagiello だが、「朝」の場合は Dynastia Jagiellonów ドイナースティヤハギエロースフで発音は I になる。表記としてはヤゲローでもヤゲヴオでもどちらでも可なのである。いささか面倒くさい。≪ノヴゴロド公国→ノヴゴロド国、ブリタニア→大ブリテン島、

ロンバルド→ランゴバルド アングロサクソンジュート→アングロサクソン、ルス→ルーシ、ブルガリア→ブルガール(人)、セントソフィア聖堂→ハギアソフィア聖堂 ばら戦争→バラ戦争、ウイリアムIIオッカム→ウイリアムIIオツッカム

強調・重視項目 商業と社会生活にかかわる用語と&信仰関連用語はフランスアナール学派の影響で急増している。シトー修道会、三圃制、重量有輪犁、大開墾運動、巡礼の流行、サンチャゴ・デ・コンポステラ、北海バルト海貿易、定期市、都市同盟、

ロンバルディア同盟、カタリ派、ジョンボール「アダムが耕し、イヴが紡いでいたとき」、カレー、フランデンブルグ辺境伯領、一二世紀ルネサンス

「被害者ユダヤ人」関連用語にも注意したい。ユダヤ人迫害、ゲットー、マラーノ。これらは「ホロコースト前史」で、戦後の反ナチズム歴史学の反映であろう。それでも新指導要領における「イスラーム重視」に比べれば、ユダヤ教・キリスト教の記述は少ない。最後に東欧重視をあげておく。イコン、ブルガリア王国、東方植民(「ブルガール」の太字強調の背景はよくわからない)

一 ヨーロッパ史学戦後歴史学のスタンスと方向性

我々はかつてヨーロッパ史をどのように習ったか。そしてどう教えてきたか。古典古代はギリシア・ローマ文化が開いたが、中世ヨーロッパは暗黒時代、ルネサンスは人間中心の新しい時代と精神、というブルクハルトの文化史観をベースとし、西欧は文明の中心となり、近代以降は他文明を従属化したというスタンスであった。しかし今日の歴史の見方は変わりつつある。いわば「近代ヨーロッパ」の相対化が顕著で、ヨーロッパ文化の中世起源が流行している。「十二世紀ルネサンス論」がこれを代表している。またEUにはフランク王国を「本来的西欧」としてイメージ化していた(ユーロ€に決まる前の有力貨幣単位はフランクのエキュエcuであった)。

ヨーロッパ文明は、近代以前はアジアに比べて経済・文化的に遅れて宗教的に非寛容であったことは紛れもない事実である。世界史教育もこの観点に立つ。ヨーロッパ史学の描く中世像をそのまま輸入することはもうできない。

二 「ピレヌヌ・テーゼ」古代からヨーロッパ中世への移行

ベルギーの経済史家アンリピレヌヌ Henri Pirenne (一八六二〜一九三五)は、一一世紀にフランドルで始まった「中世都市」がヨーロッパの経済復活の契機となり、停滞から脱したとみなした。ではどうしてヨーロッパは停滞したのか。この答えが『マホメットとシャルルマーニュ』である。



ゲルマン人の侵入によって古代が滅亡したのではなく、興亡したゲルマン諸国家は依然ローマ的統治体系に依存し、ビザンツとの交流も持続していた。しかしイスラームの侵入が転機となり、以後急激に地中海交易が衰退して遠距離交易が途絶したこと

で古代的遠隔地貿易が消滅し、自給的農業経済が矮小化、社会・経済的に封建制社会に変身したという主張で、これを端的に表すフレーズが「マホメットなくしてシャルルマーニュなし」であった。しかし、ヴァイキングの登場で遠距離交易が再開されると状況は一変し、一一世紀には「定期市」が成長して「商業の復活」へ向かう。

彼は論拠として、地中海貿易品の消滅、ソリドウス金貨からデナリウス銀貨への移行、「商人」と「市」の実態変化、王室の収入源（関税収入から王領地収入へ）、国家支配の方式が官僚から主従関係へ変わったことなどを挙げる。

ピレンヌ・テーゼ批判(1) イスラームの評価を見直す

テーゼ発表当初から批判があったが、大戦後の研究ではイスラームの影響を「小さく評価」する研究がなされ、検証の結果「ピレンヌは事実を誤認している」ということになった。その結論は以下のようであった。

メロヴィング時代の地中海貿易の規模は微々たるものだった。イスラームに地中海貿易を遮断する意図はなし。カロリング時代に地中海貿易は「消滅」していない。金貨から銀貨への移行はビザンツが原因でなされた。商業が消え自給自足生活に入ったともいえない。奢侈品貿易は途絶したが、局地的商業圏は維持されていた。

教科書の「テーゼ」反映度はいかに

現在の世界史の教科書とピレンヌ説はどのような位置関係にあるだろうか。実は好意的な表現の教科書もある。

※A社(二〇〇七年版)きっちり反映「それまでのゲルマン諸国家は、おおむね旧西ローマ帝国の統治制度を受けつぎ、地中海商業と都市生活にもとづく地中海世界も

基本的にはまだ存続していた。しかしイスラーム勢力の侵入とともに、地中海世界の統一性はくずれた。地中海はイスラーム勢力に支配され、キリスト教徒が自由に交通できなくなり、地中海商業圏は衰退した。」

※B社(二〇年度用)商業交易を重視するがフランク経済の記載なし(一一世紀の項に「遠隔地商業」登場)。だが八世紀の項にある「イスラーム・ネットワーク地図」に「おもな交易品 フランクの毛織物」の記載あり。

※C社(一九年度)序論の記述には「不安定な乱立が続くなかで、八世紀になるとフランク王国が強大化し、西ヨーロッパ世界に新たな秩序が形成されることになった。しかし、その強大な覇権も長くは続かず、九世紀半ばには分裂してしまおう。」とある。本文(カロリングの経済)では「カロリング朝の経済的基盤は、この荘園を中心とする農業にあった。商業活動では、週市が開かれ、農産物や家畜、手工業製品が取り引きされ、奢侈品も東方からもたらされたが、全体としては地域的なものに限られていた。」(下線筆者)とある。メロヴィング経済の記載はないが「テーゼ」を多少意識したともいえる。

※D社(二〇年度)封建社会の成立の項には「フランク王国の分裂後、イスラーム勢力や諸民族の侵入を受けた西ヨーロッパでは、商業活動が衰え、自給自足的な現物経済が支配的になった。」とある。九世紀を「封建社会成立期」と表現するが、それ以前の「封建制社会でない中世初期社会」の交易活動は記していない。

ピレンヌ・テーゼに対する批判(2) イスラームとノルマンの連携

ノルマン研究の進展は新しい「テーゼ」の見直しをもたらした。ロンバール『マホメットとシャルルマーニュ』は次のように主張する。

イスラームは世界規模の流通圏を実現し、フランクもイスラーム圏に接触した。イスラームがペルシア退蔵の金を投入したことで国際流通と商品の流れが一変、西欧は木材、錫、毛皮、奴隷を輸出し、ビザンツから工業製品を輸入した。ビザンツは西欧からイスラーム経由の金貨を入手し、北欧・東欧へ流した。ただし北欧でイスラーム金貨は鋳つぶされたため発見されない。

スウェーデンの貨幣史家スチュールリボーリンは『マホメット、シャルルマーニュ、及びリューリック』でさらにこれを発展させ、以下のように言う。

九世紀前半、イスラームとルーシが経済主導権を握り、イスラーム金貨とフランク金貨の「連動」と「仲介貿易」が始まった。だが九世紀中頃にイスラーム側にネットワークの変化（ダマスクスからイラク方面へシフト）がおきたため、ヴォルガ・カスピ海と北欧の直接貿易が伸長し、結果フランクの「仲介貿易」が敗退する。ノルマンとフランクの交易品（刀剣、ガラス・陶器）はイスラーム銀貨で決算されるようになった。そのため九世紀中以後はフランクの北欧向けの輸出は「内部生産物」＝農産物になる。この交易スタイルが一一世紀「商業の復活」の底流になる。

イスラーム研究から「テーゼ」を見直す

近年のイスラーム研究は「ネットワーク」に注目してきた。ここから中世ヨーロッパをみると「テーゼ」はどう映るか。宮崎正勝、家島彦一の両氏は以下のように言う。

ムスリム商人が蛮族（西欧）を世界経済の中に組み入れた。つまりヨーロッパ側の見方とは反対にムスリムの活動で地中海は「閉鎖的な湖」でなくなった。ユダヤ人・スラヴ人・スカンジナビア人による西北ヨーロッパ・ルートが拓かれ、エジプト・シリアをビザンツ帝国から奪いって大量の貨幣を投入して活性化させ大ネットワークを組織し、地中海の交易は途絶してはいない。ただ、当時西ヨーロッパはイスラームの欲する交易条件（商品）がなく、「お得意さま」になり得なかった。

もうひとつの視点 ビザンツ帝国との関係性

テーゼのもう一つの論理は「中世ヨーロッパ成立の契機はビザンツからの離反」というものである。いわゆるカトリックとフランク王権の結合である。しかし歴史の必然は結果論でしかない。八世紀初頭までの「ビザンツ・西欧関係」は「友好的・東方尊重」（大月康弘）であった。七一四〜七四六年、ローマ側は方針を転換しカロリングに急接近する。その理由はビザンツとの政治的関係の変化と、ランゴバルトの脅威に直面した「ローマ側の積極的政治選択の結果」だが、イコノクラスムは対ビザンツ関係の一面に過ぎず、焦点はラヴェンナ総督にあった。また「キリスト教史観」で常

に悪者扱いされてきたランゴバルトだが、このときまでは友好的な関係を保ち、ラヴェンナ総督府を掣肘してくれる頼るべき味方であったことを忘れていない。フランクではなくランゴバルト王権との結託という可能性は大いにありえた。いずれにせよ「アラブ勢力の伸張の結果」ではない。

「イコノクラスム」をめぐる三角関係（実は四角関係）

レオンの聖像禁止令（七二六）からの政治的な動きを挙げておく。教皇グレゴリウス三世の非難の回答は、穀倉シチリアを含む「東イリリクムはずし」（七三一）であった。反ローマに旗色を変えたランゴバルトはラヴェンナを陥落させ（七五一）、教皇ステファヌス（三世、前任の二世は即位三日で卒中死）のアルプス越えとピピンへの塗油（七五四）と続く。このあとピピンは動くが、ステファヌスが与えた称号「ローマのパトリキウス」はビザンツ宮廷内の爵位であった。ビザンツの足下に列する称号を与えた教皇、そしてそれを拒否したピピン。ともあれビザンツとフランクは「冷戦」状態になり、皇后イレネ摂政期（七八五〜八〇二）の関係修復とクーデタによる失脚を経て「離反」に至る。九世紀になるとビザンツは東地中海の制海権を失い、ここでノルマン人が地中海に進出してくる。

三 「十字軍」再考

中世第2クールは一一世紀から

一〇世紀後半から一一世紀初頭に大変化がおきたというのが歴史の共通認識になりつつある。森安孝夫氏のいう「遊牧騎馬民の軍事政権」もこれに合致する。ヨーロッパ史学では「中世高期」という言い方もするが、中世高期は気温の高い時期でもあった。地球環境考古学は、八〇〇〜一三〇〇年頃は「現代並みかそれをやや上回る程度の暖かさ」が全地球的規模で起きたと分析している。一四世紀中頃〜一九世紀中頃は「北半球における弱冷期」（気温低下は1℃未満）である。

気温と歴史の関係をまとめるとこうなる。古代は高温期で末期に寒冷化し「ゲルマン南下」をもたらす。中世前期は低温（ピーク一〇世紀）。しかし「紀元千年」が過

きて気温は上昇し、急激な「経済成長期」になる。一二世紀には「大開墾時代」を迎えるが、一四世紀には「気温下降期」に入り、不作と疫病・戦乱期になり、近世に「少し気温上昇」するが一七世紀中頃に再び「寒冷傾向」へ。

一一世紀は環境史的に見てもヨーロッパの「膨張の時代」であった。

十字軍の評価と新しい視点

croisade (仏)・crusade (英)・cruzada (西)・crociata (伊)・Kreuzzug (独)の語源は「巡礼」「旅行」。元の言葉はcruciata(羅)。crucio「十字架刑に処する」で、一二世紀には「十字のシルシをつける」になり、一三世紀には完了分詞化して「十字軍」という言葉になった。公式用語になったのはインノケンティウス三世時代である。

十字軍は通例七回または八回だが教科書では「七回」。ただし研究者によってナンバリングが異なる。「聖地」という表現は一二世紀初めに出現した。第一回十字軍のときには「聖都」とだけ。

十字軍運動という「通説」の見直し

通説は「時代と共に純粋性を失い、初期の宗教的情熱は世俗的利害に取って代わられた」という。第一回は「ひたすら純粋な宗教的動機」だったが、第四回は「不純で悪名高い」。そして第六〜七回は、仏王ルイ九世の意図が「聖地解放でない」と下方修正される。とりわけ第四回十字軍は「当初の目的をすてコンスタンティノープルを占領」、「ビザンツの商敵ヴェネツィアにそそのかされた」とコキ降ろされる。

だが八塚春児氏によれば、第一回目も「教皇の東西教会統一」「諸侯騎士の領地戦利品獲得」「都市の商圈拡大」「農民の負債帳消し」「身分的自由への期待」等、非宗教的動機で一杯である。通説とは逆に「時代が下がると世俗的動機が薄れる」、あるいは「初めの頃より敬虔さが強調される」が事実である。

クレルモンで何があったか

クレルモンは「公会議」ではなかった。聖職者定数不足の「会議」、「集会」である。さらにウルバヌス2世のDeus vult「神が欲したもう」という言葉は後世の「宣伝用キャッチコピー」であって、元々は行進の掛け声であった。唯一の成果が「聖戦思想」

の定着である。この時期は叙任権闘争の真つ最中で、前任グレゴリウス七世はローマを追われ亡くなっている。グレゴリウスの「聖戦」引き継いだウルバヌスが「しもべ」となる直隸軍獲得のチャンスをものにしたと言えよう。そして確実に大衆的支持を受け、「聖なる事業」が始まった。聖戦思想は「世論」を形成し、勸説・組織・特権・義務・エートスを捲き起こした。その「正当性」を批判することは自己のキリスト教的正統性の否定を意味する。同時代人のメンタリテイでは不可能である。

騎士たちの「採算性」を考える

十字軍は「採算」のあう仕事ではない。投入された「信念」と「情熱」に対しての見返りはごくわずかである。一二世紀初頭には早くも「十字軍熱」はダウンし、聖地は慢性マンパワー不足に陥る。一三世紀以降、十字軍は緊急対応のために行われ、「領土野心・略奪期待」よりも「宗教的動機」が前面に出てくる。だが「出費超過」は明らかで、第四回十字軍の悲劇(喜劇)は支出過多に対応しきれなかったためである。

四 「最初の近代人」フリードリヒ二世とノルマン国家

交渉と対話―戦わずに聖地を取り戻す

教皇主導の最後の十字軍が「五回目」(一二二七〜二二)である。ラテン帝国(一二〇四〜六一)時代の「二重派遣」のため通常は回数に入れない。フリードリヒは要請されるが参加しなかった。皇帝就任と十字軍はセットであったにもかかわらず。

フリードリヒの評価は近代になるほど高い。「世界の驚異」「王座の最初の近代人」、「ヨーロッパ最初の絶対主義君主」、マルチリಂಗアルで、ハーレムにはアラブ人女性がいいて、教会にムスリムの絵を描かせたり、アラビア語の刺繍入りマントを纏い、ニカイア帝国皇帝やアイユーブ朝スルタンのアルハカーミルと文通した等々、確かに敬虔なキリスト教徒なら眉をひそめる行状であろう。それゆえ目の敵にされる。

十字軍実行と引き換えの皇帝位であったが、遅延で破門される。彼は第五回十字軍を立ち上げたが、戦わず交渉で和解したので教皇は十字軍認定をしなかった。

一二二九年二月、十年間の休戦条約(イエルサレム、ナザレ、シドン、ヤッファ、

ベイルート割譲が条件)が締結された。①皇帝にエルサレム統治権②岩のドームイ
スラム管理③キリスト教徒もドーム立入④和平協定を破る軍事行動に対しては皇
帝がイスラム君主を守る義務、がその内容であった。一二二九年三月、エルサレ
ムで戴冠し直後に帰国する。一二三〇年、教皇派を撃破し破門を解かせたが、再度破
門され皇帝解任宣言を受けたりしている。フリードリヒは一二五〇年に没した。

時代の異端児というべきフリードリヒのバックボーンはどこにあるのか。生地シチ
リアという独特の環境に着目する。

ノルマン国家の先進性 オートヴィル・ノルマン朝

ノルマンディの傭兵から政治勢力へ。彼ら一族は南イタリア・シチリア島でそれぞ
れ自立し「両シチリア王国」を形成した。著名人としては次の二名がいる。シチリア
伯ロジェリウス二世(ロジェール/ルτζェーロ)はアブリア公、シチリア王(位一
一三〇〜五四)。国王ウイレルムス(グリエルモ)二世(位一一六六〜八九)。

一二世紀末、シュタウフェン家が婚姻継承し、ハインリヒ六世の子としてフリード
リヒが生まれる(シチリア王名はフェデリコ一世)。両シチリア王国の統治は「効
率的官僚組織と徴税システム」を持ち高度に官僚化・専門化され、「世俗的近代行政
の先駆け」との評価が定着している。通説に従いその組織を少し詳しく述べる。

行政組織のヒエラルキー

行政組織の頂点には「王宮評議会」があり、その下に「財務委員会」さらに2つの
「財務監督局」(1、2)が並立し、おのおの別の対象を扱い、職域の区別があった。

1)ドゥアーナ・デ・セクレテイス 王領地関係の財務行政

2)ドゥアーナ・パローヌム 封土関係の財務行政

この下部に「財務局」(ディーワーン・アルマームール…徴税、農民管理)を持ち、
さらにその下に「収益局」(ディーワーン・アルファワイド)があった。

ディーワーンは「記録・帳簿」「財務官庁」「政庁」を意味するアラビア語で、ラテン
語がドゥアーナである。

新研究—ノルマン行政組織は「近代的」ではなかった

高山博氏は前述のような通説は「中世に近代的行政制度を見つけようとして、ノル
マン国家の組織名称から導き出した」としている。旧行政単位や役人はたしかに存続
していた。土地台帳・住民名簿が利用され、ギリシア人官僚とアラブ系役人が引き続
き雇用されていた。これが「財務監督局」(ディーワーン・アッタフキーク・アルマ
ームール/ドゥアーナ・セクレテイス/メガ・セクレトン)である。この部局はア
ラビア語の土地台帳、寄進状の保管管理、土地調査業務、境界画定、境界記録簿作成
と保管という業務を担当していた。だがウイレルムス二世期に「王国最高顧問」(ド
ゥアーナ・パローヌム)が新設される。これは二つのドゥアーナを監督した。

1)ドゥアーナ・セクレテイス シチリア&カラブリア土地行政を担当(@パレ
ルモ王宮||島部)し、王宮侍従官が指揮したが、役人は大部分がアラブ系。

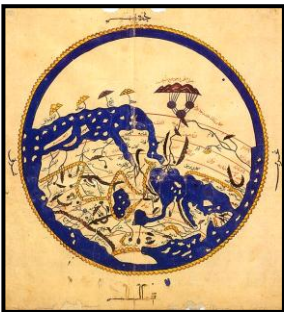
2)ドゥアーナ・パローヌム カラーブリア以北の全行政事項を統括(@サレルノ)
1と2は管轄地域が異なり、管轄対象もやや異なる。そして「財務委員会」なるも
の存在せず、全土均一行政制度は一度も導入されていない。

結論としては、ノルマン王国の行政制度は通説の言うような「近代行政の起源」で
はなく「異なる制度のモザイク」にすぎなかった。

それでもその「先進性」は西欧のほかの地域に比べれば特筆に値する。その財務行
政と司法行政は「ある程度」発達していたから「近代的行政制度のさきがけ」とい
う評価は決して覆うことはない。

留保つきの評価 「一二世紀ルネサンス」

北方からの訪問者はここでイスラムの中の科学・古代哲学すなわち「外来の学問」
を学んで帰っただけにすぎない。それを割り引い
ても貢献度は注目し値する。たとえば次のような人物
がいる。バースのアデラード(一一〇九〇〜一一六〇
頃)、ソールズベリーのジョン(一一一五〜八〇)、プ
ロアのペトルス(一一三〇頃〜一二二二頃)、そして
イドリーシー(一一〇〇〜六六)。彼は銀板に描いた



世界地図とその説明書『世界各地の全知識を望む者たちの慰み』通称『ロゲリウスの書』を王に捧げた。

ビザンツとギリシア・ローマ古典のかわり

「ビザンツにはギリシアの古典やローマ法がそのまま保存され、十字軍を契機に交流が再び活発になり、それらが西ヨーロッパに伝わった」と教えてきた。しかし最近の研究はこの説を否定する。

七世紀後半〜八世紀のビザンツには、古典文化の破壊行為が行われた「暗黒時代」があり、世俗文献はこのとき「ほとんど消滅」。九世紀になって学問的活動が徐々に再開される（「ビザンツ九世紀のルネサンス」と呼ぶ）。「アラビア語に翻訳された著作と九世紀前半に書写されたギリシア語の最初の世俗写本との間に、ほぼ完全に明白な相関関係がある」という。すなわち古代ギリシアやローマの古典は、ビザンツでも一旦途絶え、西欧同様にイスラーム世界から逆輸入された。実はイスラーム側はこれまでもそう主張してきている。我々はそれを無視してきたのである。

おわりに、十字軍もおわり

シュタウフェン朝断絶後、シチリアは仏王家傍流のアンジュー家支配へ遷る。初代はシャルル一世「d'Anjou」ダンジュー（シチリア王兼ナポリ王 位一二六六〜八二）。聖ルイ（Ⅷ）の弟である。彼は兄の遺志を継ぎ十字軍を計画した。

「シシリアン・ヴェスパー」

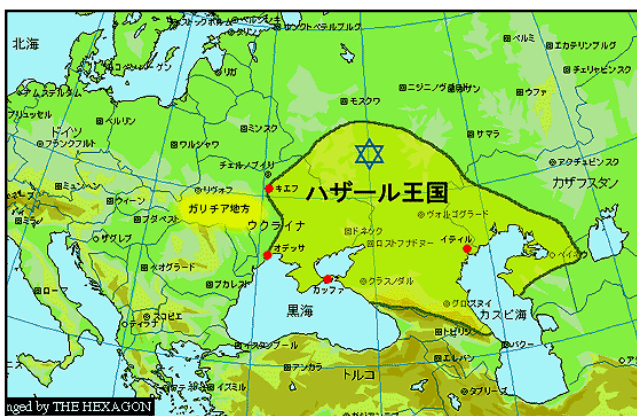
一二八二年 通称「シチリアの晩鐘」（晩鐘）Vespri siciliani」と呼ぶ事件が勃発する。仏兵のシチリア女性暴行をきっかけに全島が暴動化し、復活祭翌日の晩鐘の鐘を合図に仏系住民四千人が虐殺された。このためシャルルは計画を諦め、東方向け十字軍は終了する。その影響で一二九一年、十字軍国家の最後の拠点アッコンは陥落し「海にたたき落とされる」。この事件は「中世的理念の挫折」であり、以後の英仏西欧各国の君主をして「インターナショナル」から「ナショナル」の足元固めに向かわせた。

これ以後も十字軍という名前を付けた軍事行動はあったが「東方向け」はない。時代は下り、一五七一年のレパント海戦では、ついに十字軍が組織されず「神聖同盟」が名目上の戦闘主体となる。「主権国家」の出現イコール十字軍の終焉である。

補注1 イスラームとヴァイキングの間に介在したハザール王国

東欧とイスラームをつなぐ要地にあったのがハザール（ハザル）王国で、ユダヤ教に改宗したためアシケナージ系ユダヤ人の祖先という俗説で知られる。この国の動向は前述ボーリンの説にかかわる。

ハザールは七世紀半ばに突厥帝国の内紛に乗じて独立。『旧唐書』にある康国（サマルカンド周辺）に北隣する「突厥可薩部」らしい。カスピ海北岸にうつって新興イスラーム勢力に対抗、七三〇年にユダヤ教に改宗した。伝承ではイスラーム法学者とビザンツ正教の聖職者とユダヤのラビを招いて論争させ、そのうちで最も優れたユダヤ



教に改宗したという。ウマイヤ朝の侵攻でカリフ宗主権に屈したが、アッバース革命期に独立を回復、ヴォルガ川の河口付近に首都イティルを建設し東欧〜ヴァイキング・ノルマンとの交易で繁栄した。支配者層はユダヤ教、住民はイスラーム。九世紀後半より衰え、キエフ大公国の攻撃で解体へ向かうが、ブルガールはこれを機にイスラームとの交易で繁栄する。

時期と位置関係から見ると、東欧・北欧とイスラームの間に立ちふさがっていたハザールが衰え、ヴァイキング経済は九世紀にダイレクトにイスラーム・ネットワークに接続したことになる。

ハザールはビザンツとの関係が深い。ハザール王妃がレオン三世の子に嫁ぎ、次の皇帝の生母となった（コンスタンティノス五世の子レオン四世。彼こそシャルルマーニュと関係復活を求めた皇后イレエネの夫帝）例もある。ビザンツ史料から読み取れるハザール像はかなり大きい。

補注2 聖像破壊運動「イコノクラスム」の見直し

七三〇年、シリア出身の皇帝レオン三世は、イコン崇敬を禁じる勅令（聖像禁止令）を発した。勅令は首都やヨーロッパ側住民の反発を招き、文化的・政治的にも帝国を二分した。レオンの子コンスタンティノス五世時代も混乱は収まらず、ローマ教会も非難して税の支払いを停止している。結局七八七年の第二ニカイア公会議（第七全地公会）でイコン崇敬の正統性が再確認された。政治面で見れば、聖像製作者の拠点であった修道院が徹底的に狙われ、帝国の耕地の三分の一にのぼる修道院領が没収され、皇帝の権力基盤の強化と専制君主化へ向かう。このため聖像破壊運動自体が修道院勢力つぶしのためという説もあるが、聖像崇拜の復活後、聖像破壊派の著作は異端の書として破却されたためはつきりとした理由は明らかでない。

「偶像否定のイスラームからの影響」は事実には反する。杉田英明『イスラームと芸術』によると、八世紀前半のイスラーム社会は「絵画に対して寛容ないし無関心」な時期であって、第二ニカイア公会議でイコン崇敬を承認したビザンツへの反発が、イスラーム世界で絵画不寛容の精神を生んだ一因であるという。つまり影響を受けたのはビザンツ側ではなく、むしろイスラーム側であった。

補注3 イスラームの翻訳運動

ギリシア人であるデイトリクダスは、『ギリシア思想とアラビア文化 初期アッバース朝の翻訳運動』でアッバース期におこなわれたギリシア古典の翻訳活動を積極的に評価している。しかしバグダードにあった「知恵の館」との関連性には否定的である。ここはアッバース朝による国家的・組織的翻訳機関などではなく書庫のようなもので、ギリシア古典のアラビア語への翻訳活動は「民間レベルの翻訳の積み重ね」と見なしている。

《参考文献》

- ・アンリ・ピレンヌ（中村・佐々木訳）『ヨーロッパ世界の誕生―マホメットとシャルルマーニュ』創文社（原著 Mahomet et Charlemagne 一九三七） 一九六〇
- ・J・P・ウサル（井上訳）『シャルルマーニュの時代』平凡社 一九七三
- ・ピレンヌ他（佐々木編訳）『古代から中世へ』創文社歴史学叢書 一九七五
- ・ピレンヌ（佐々木編訳）『古代から中世へ―ピレンヌ学説とその検討』創文社 一九八〇
- ・平城 照介「イスラームの発展と地中海世界」『岩波講座世界歴史』第7巻 一九六九
- ・M. Lombart "Mohamet et Charlemagne" 一九四七
- ・S. Bolin "Mohamad, Charlemagne, and Ruric" 一九五三
- ・宮崎正勝「イスラーム・ネットワーク」講談社選書メチエ 一九九四
- ・家島彦一「イスラーム世界の成立と国際商業」岩波書店 一九九一
- ・大月康弘「ピレンヌ・テーゼとビザンツ帝国―コンスタンティノープル・ローマ・フランク関係の変容を中心に―」『岩波講座世界歴史』第7巻 一九九八
- ・森安孝夫『シルクロードと唐帝国』講談社 二〇〇七
- ・ブライアン・フレイガン（東郷えりか訳）『歴史を変えた気候大変動』河出書房新社 二〇〇一
- ・八塚春児「十字軍」『岩波講座世界歴史8 ヨーロッパの成長』岩波書店 一九九八
- ・ルネ・グルツセ（橋口倫介訳）『十字軍』白水社 一九五四
- ・橋口倫介『十字軍―その非神話化』岩波新書 一九七四
- ・高山博『中世地中海世界とシチリア王国』東大出版会 一九九三
- ・同『神秘の中世王国 ヨーロッパ、ビザンツ、イスラーム文化の十字路』東大出版会 一九九五
- ・同「地中海のノルマン人」『岩波講座世界歴史7 ヨーロッパの誕生』岩波書店 一九九八
- ・同『中世シチリア王国』講談社 一九九九

- ・伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』岩波書店 一九九三
- ・堀米庸三『西洋中世世界の崩壊』岩波書店 一九七五
- ・ランシマン(榊原・藤沢訳)『シチリアの晩禱―十三世紀後半の地中海世界の歴史』太陽出版 二〇〇二
- ・杉田英明(「イスラームと芸術」竹下政孝編『イスラームの思考回路』(講座イスラーム世界4)悠思社 一九九五
- ・デIMITRIUKダス(山本啓二訳)『ギリシア思想とアラビア文化 初期アッバース朝の翻訳運動』勁草書房 二〇〇二

《参考画像》

ソリドウス金貨レオン3世 皇后エレネ



ルツジェーロ(ロゲリウス)2世



アルカールミル(右)とフリードリヒ



フリードリヒと鷹



シャルルダンジュー

